

『クリスティーナの帰郷』

ホーフマンスタールのカザノヴァ劇(1)

佐 藤 方 代*

über "Cristinas Heimreise"

Michiyo Sato*

はじめに

ホーフマンスタールは、ヴェネチアとロココへの親近感を背景にして、ジャコモ・カザノヴァに興味を寄せた詩人のなかの一人である。すでに初期の韻文劇『冒険者と歌姫』はカザノヴァ回想録中の挿話を下敷きにしたものであり、恋の冒険者が漂わす仮象の美に彩られていたし、また、ノイハウス（新しい家即ちカザノヴァ）を女主人公とする『シュテルンのジルヴィア』も、カザノヴァの面影を念頭においた作品である。

ここでとりあげる『クリスティーナ^①の帰郷』も、回想録中の物語を題材にした作品であり、主人公フロリンドはカザノヴァの姿を写している。当初はオペラ台本として構想され、その計画が放棄されたのち1909年に発表された喜劇作品である。1910年ラインハルトによりベルリンで初演された。初期に創作の中心をなした韻文に別れを告げてしばらくののち、演劇と歌劇台本に力を注ぐに到った時期の作品で、完成をみた喜劇としては最初のものである。この前年に同じ題材による未完の『フロリンドと見知らぬ女』及び『カルロとの出会い』が発表され、後になってまた改稿がくりかえされたことからみても、作者が強い愛着をおぼえ、創作意欲をそそられる素材であったと思われる。

回想録中のクリスティーナ挿話

素材となっているのは、『カザノヴァ回想録』第2巻第8章の最後、カザノヴァが田舎風に着飾った愛らしい少女クリスティーナに目をとめ、同じゴンドラに乗りこむくだりから10章はじめにかけての、この少女との交流を記した物語である。

クリスティーナは、人生の目的は結婚であり、人を愛するのはその目的のためと信じている無

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages)

邪気な村娘である。ヴェネチアの男と結婚することを望んで故郷の村から出て来たために、カザノヴァと出会う。そのクリスティーナの愛らしさにひかれたカザノヴァは、結婚の約束をして彼女を誘惑するが、目的を果すやその気をなくしてしまう。けれども彼女を不幸にしたくなかった彼は、「あらゆる点で私よりすぐれている夫を見つけてやろうと考えた。かの女がわたしの無礼を許すばかりでなく、わたしの騙しをなつかしがり、よりいっそうわたしを愛するようになるほど、それほど素晴らしい夫を探してやろうと思った。」^②……」この奇妙な虫のいい目論見が完全な成功をおさめ、娘は喜んで別の男と結婚し、カザノヴァに心から感謝して幸せな一生を送ることになる、というのがクリスティーナの挿話である。回想録のこの部分は、はじめから終りまで陽気な雰囲気とふしぎな幸福感に満ちており、誘惑も変心もその明るさに溶けこんでしまっている。クリスティーナを誘惑して捨てたカザノヴァは、彼女の発散する素朴で堅実で力強い生命感に驚嘆し、欲しいものを十分に手に入れるのはクリスティーナの方なのである。

『クリスティーナの帰郷』の登場人物

以上のような物語のあらすじを、ほぼそのまま借りた『クリスティーナの帰郷』では、カザノヴァはフロリンド、即ち「花咲く男」という名を与えられている。一方、回想録では何も知らずに理想的な夫となるに過ぎないクリスティーナの結婚相手が、重要な意味をもつ人物像として、影が形に添うように終始フロリンドに対置されている。現実の人生を支える誠実と寛容を体現する船長トマゾがそれである。そしてその周囲には、喜劇にふさわしい個性を具えた人物が数多く配置されているのである。

この稿では、ロココ時代の冒険者が繰り広げる誘惑絵巻のイメージをもとにホーフマンスタイルが把握し表現しようとした人間の姿が、この作品の中でどのように展開され実現されているのか、その構成と人物配置をたどりつつ考えてみることにする。

出会いの空間

この喜劇には、単純で大きな二つの主題がかかげられている。一つはクリスティーナを瞬間的な愛の情熱に引きこむフロリンドの誘惑であり、もう一つはトマゾとの結婚が象徴している永続的な愛と人生への結びつきの達成である。劇の構成の上でも、この二つの主題の展開に対応する場として、ヴェネチア（第1幕）と山の村カポチボンデ（第3幕）が設定されている。第2幕は両者の中間に位置する場所が舞台となっている。表題の『クリスティーナの帰郷』とは、ヴェネチアからの帰郷の旅を意味している。図式的に言えば、クリスティーナが村の中で結婚することを望まず相手を求めてヴェネチアに滞在したことから誘惑者の魔的な仮象の圏内へ巻きこまれ、ヴェネチアから遠ざかって故郷へ帰ったとき、人生の伴侶を見出し現実の生活へ帰還を遂げるという構成になっている。

水上に浮ぶ不安定なイメージの都市ヴェネチアは、トーマス・マンが死に魅入られた芸術家を誘う美の世界として描き出したように、夢と仮象と冒険に満ち、現実を超える美と陶醉の瞬間が姿を現わす空間に他ならない。ホーフマンスタールは、そのようなヴェネチアに強い関心と親近感を抱き続けていた。早熟の天才詩人として活動を始めたごく初期の詩劇『ティツィアンの死』には、偉大な画家の弟子がヴェネチアの市街をはるかに望んで、生命の躍動に想いを馳せる表現がある。その華麗な美と芸術への讃歌は断片に終わっているが、ヴェネチアに由来する作品である。あるいは、ヴェネチアの姿そのものをユーゲントシュティールの文様を思わせる一篇の詩的散文に定着させたエッセイ『美しい日の思い出』、ヴェネチアが重要な意味をもつ空間として構想された未完の大作『アンドレアス』、その他『救われたヴェネチア』など、ヴェネチアに関わりをもつ作品の数は少なくない。さきに述べたもう一つのカザノヴァ劇『冒険者と歌姫』も、虚実の境のあいまいな妖しい不確かさを色濃く漂わせている点で、『クリスティーナの帰郷』よりもいっそうヴェネチアに密着している。

ヴェネチアはまた交易の都市であり、そこに醸し出される都会的な自由と享楽の空気にひかれて、さまざまな人びとが行きかい交差する空間でもある。そうしたイメージの中で、主要な三人の人物——生活に根をもたぬ遊蕩児である主人公フロリンド、35年間も遠い異国で過ごし数々の危険に出遇って生死の境界をくぐりぬけて来た船長トマゾ、そして彼らとはおよそ共通の場を持たぬはずの純朴な村娘クリスティーナ——は出会うことになるのである。

第一幕はヴェネチアのラグーナに面した広場で、フロリンドとトマゾ、トマゾとクリスティーナ、フロリンドとクリスティーナが出会い、そこでそれぞれの位置と互いの関連の構図が予感される枠組みを持っている。

これら三人の他に、喜劇らしいイメージを盛り上げ狂言回しの役割を努める二人の人物が配置される。異国から帰ったばかりのトマゾが連れて来た混血のマラヤ人ペドロと、クリスティーナの伯父でカポチポンデの司祭を勤める純朴そのもののドン・ブラジウスである。ペドロは、「ヨーロッパ風のお仕着せのような衣装をつけているが、皮膚の色や髪形は異風^③」であり、「外国のヨーロッパ人（ausländischer Europäer）」と自称し、言葉づかいも奇妙なカタコトである。ドン・ブラジウスは閉鎖的な村の中に住みついているらしい人物で、底ぬけの善良さと鈍さを具え、登場人物の中でただ一人、出会いや別れやそれにまつわる葛藤と無縁に過ごしている。

喜劇は、ペドロとドン・ブラジウスが偶然に出会うところから始まる。村からクリスティーナを迎えにヴェネチアにやって来た司祭が、ペドロに道を尋ねようとする。その短いやりとりの間に、三人の主要人物のおよその輪郭が描き出される。二人の会話は、すれ違いのおかしさを軸に組み立てられているが、その中で、クリスティーナは村の娘で、結婚相手を探すためにヴェネチアに来たこと、ペドロの主人が船長であること、フロリンドなる人物がヴェネチアのさまざまな女達のもとで夜を過していることが明らかになる。クリスティーナは、登場する前に、軽薄なヴェネチアの女達と区別して印象づけられ、彼女が村に安定した生活の地盤である宿屋と持参金を持っていることも報告される。一方で、フロリンドはすぐにカザノヴァのイメージを呼び起こす。

フロリンドは自信にみちた蕩児に相応しい尊大で鷹揚な態度で登場する。女達に近づく術を知らず、彼女らの家で観迎されないトマゾに親切な心くばりを見せながら、結局のところ自分だけがその家の中へ姿を消してしまうのである。この場面でのフロリンドの姿や振舞いは、カザノヴァという半ば普通名詞化した名前が表わす、快楽の追求者のイメージ通りの形をしている。それがあまりにも典型的で図式通りであることから、かえってそのイメージが強化され、さらには喜劇的な誇張としても効果的である。

そうしたフロリンドの姿が一旦見えなくなったところへクリスティーナが現われ、取り残されたトマゾと出会う。この場面においてトマゾの人物像が次第に明らかになっていく過程で、クリスティーナの髪の止め金が重要なポイントとして使われている。

山から来たって！きっとそうなんだ。……おれの母さんが、あんな風な銀の止め金を髪につけていた。あの娘のことは忘れない……^④

トマゾは、ヴェネチアではなく堅実な生活の場を象徴する山地の村の出身なのである。クリスティーナの髪の止め金を見て、女達がちょうどそれと同じ止め金を髪につけている村々とそこで営まれる人生へ、トマゾの憧れが広がっていく。

おれは故郷へ帰って、なんの取り柄もないが至極まじめな女と結婚し、……そして子供をもうけたなら、その子はおれとは違った、ましな男になって、あんな娘と結婚する……おれが墓場に入ったずっとあとで、そうなるんだ。^⑤

未来へつながらる世代の環に希望を托すこれらの独白は、フロリンドの放恣と対照的なトマゾの、篤実な人生への意志を示している。それが、ヴェネチアと山の村の対比に重ね合せて表現されるのである。フロリンドはヴェネチアを体現し、トマゾは山地の村に属している。フロリンドが女達と共に居る部屋を指してトマゾは、

……あそこには何も求めるようなものはない。あの陽気な奴が楽しい夜を過ごして愉快地目覚めるといいね。おれ達は明日旅に出よう。おれはむこうの田舎の山の方で、チャンスを探ねてみることにする。そこに骨を埋めようではないか。^⑥

クリスティーナが結婚の相手を求めてヴェネチアへ出て来たのとは逆に、山の村で結婚し人生を送る機会を求めて出発しようとトマゾは決心する。そこには、この喜劇の全体的な構図が投影されており、フロリンドに対置されるトマゾの形姿が、彼自身の独白に近い台詞によって浮び上がっている。この場面でクリスティーナは、ペドロの奇妙な風体で足を止めたものの、トマゾに対して特に関心をもつことなくその場を離れて行く。この時は未だ、彼女はトマゾの存在を見出しえないのである。

フロリンドの誘惑

フロリンドは出会いの当初から、クリスティーナの心にある種の揺らぎを呼び起こす。その心の揺らぎの表現として、フロリンドにじっと見詰められたときの彼女のしぐさが、ト書で次の様

に指示されている。

クリスティーナは振向いて、彼をみとめ、トランクの上へ坐り居ずまいを直す。フロリンドが視線をそらさないで、小鳥の方へ指をさし出し、……ついにはくちびるを鳥かごの格子へ押しつける^⑦。

その様子を上の窓から見ていたフロリンドはとび出して来て唐突に、

小鳥にはもったいない！無分別な生き物がそんな過分な幸運を授かる値打ちなんかないんだ。ぼくは君がぼくの目の前で、その小鳥にキスなどして欲しくないよ。

(走って家の中へ戻る。クリスティーナは耳まで赤くなる^⑧)

この場面だけで、すでにフロリンドの誘惑がクリスティーナの上に投げかけられ、彼女が意識下でそれに応じていることが暗示されている。フロリンドのまなざしによる誘いを受けて、彼女は無意識にコケットなしぐさを小鳥に向ける。そこに一瞬現われた内面のゆめめきを素早く的確に捉えて、誘惑者は彼女の内側へ効果的な言葉をすべりこませる。その少し後の場面でフロリンドがクリスティーナと交す会話は、この喜劇の構想全体を知る上で重要なものであると思われるので、その主要な部分を抜き出してみる。

FL: (……人に魅せられたとき、ぼくには言葉はうかんでこない。現われてくるのは……)
ぼくの血管の中で煮えたぎり発酵するもの自体、その本質なんだ。言葉はただ標識に過ぎないんだ。……それはぼくを……目を閉じて火の中や水の中へ入って行く人間にしてしまうもの、一度の口づけの喜びに子どものように泣くことのできる人間にしてしまうもの……そして、あるときまでは、夢遊病者のように生のもっとも忌まわしい深淵を跳び越え、現実のだらけた哀れむべき状態の中へ崩おれることなしにいられる――

CR: つまり、目的を達してしまうまでは、ということなのでしょう？……

CR: 目的のことを言うのなら最終の目的を考えなくては。

FL: もちろん、最終の目的のことを考えているさ、……

FL: ……魅惑するものと、魅惑を感じ取ることのできるものとの間の……

CR: つまりは男と女の間のことね、それならはっきりしているじゃないの。

FL: ぼくもそれは確かにはっきりしていると思うよ。それを口に出してしまうのかい？

CR: ……教会での正式な結婚のことよ……

FL: (後ずさりして) 確かに。(言葉につまる。)^⑨

「人に魅せられる」ことの意味をめぐって始められたこの対話の中で、次のようなことが明らかにになっている。即ち、クリスティーナにとって「人に魅せられる」とは男と女の出会いを機械的に表わす日常的なレベルの言葉でしかない。他方、フロリンドは、「人に魅せられる」ことに触発される、日常の生活とは無縁の内的な情動と陶醉を追い求めている。その当然の帰結として、

この対話のもう一つのキーワードである「目的」という語も、ここでは二重の意味を帯びてくるのである。フロリンドにとっては、魅惑し魅惑される者としての男と女の結びつきの「目的」は、日常的な言葉によって秩序づけられていない始源的な陶醉と恍惚を成就することにある。それに対してクリスティーナの言葉の圏内では、同じことの「目的」が、その最も日常的な形式即ち教会における結婚に到達することに他ならないのである。“……生活内容の担い手としての言葉と、その同類で詩の中に記される夢幻的な言葉とは、互いに離れようとし、互いに他人のようにすれ違っていくのです。^⑩”と、ホーフマンスタールは〈詩と生活〉と題する講演（1896年）の中で述べている。フロリンドの言葉は詩の中で記されたものではないけれども、上の対話は、同じ文脈における「言葉のすれ違い」の喜劇的な表現とみることができる。

いずれにせよ「人に魅せられる」事実は、言葉以前に存在する。クリスティーナはフロリンドの言葉を理解しえぬまま、彼にひきつけられていく。

あなたの話したことは一言もわからないわ。ただずっとあなたを眺めていただけよ。^⑪
 とはいえ、さらに親密さを求めるフロリンドに対して、クリスティーナは単純明解な結論を下すのである。

あなたが私の夫なら、私は本当にあなたを好きになれるのに。^⑫

以上のように、第1幕の中で、フロリンドの世界とトマゾの世界の輪郭が描き出され、フロリンドとクリスティーナの結びつきの様相が暗示されている。第2幕以下において、それらが予感している誘惑、そしてその破綻が露わとなり、トマゾとクリスティーナの恒常的な結合が達成されるという構想の実現へ向って展開することになるのである。

フロリンドとトマゾ

第2幕はヴェネチアからクリスティーナの故郷の村への途上にあるセネダの宿が舞台になっている。ここにクリスティーナの一行（彼女の他にブラジウス司祭と召使いのパスカ）、彼女を追ってきたフロリンド、それに山地の村へ住みつくために、ペドロを伴ってヴェネチアを出発したトマゾが同じ宿に泊っている。この宿はヴェネチアから離れてはいてもフロリンドの勢力の及ぶ範囲内にあり、以前にも訪れて多くの女性と交流した場所であったことが暗示される。そこでフロリンドは、楽士達を雇い、ろうそくを豊富に灯し、特別の料理を誂えて、クリスティーナの一行を晩餐に招く。

舞台上の前景でトマゾが相客と簡素な食卓を囲んでいる後ろに、フロリンドが特別に用意したパーティーの部屋があり、ドアが開くたびにろうそくの火がこぼれ、音楽が流れて来る。その一部始終をかいま見て、トマゾはフロリンドに対し讃嘆のためいきをつくばかりである。一方、“未だろうそくの灯の下で会ったことがないから”とクリスティーナを誘い、花と光と音楽に包まれて食卓を共にし、ヴァイオリンを片手にみずから歌い踊るフロリンドは、クリスティーナの心を捉えると同時に、彼自身も生き生きとした歓びに輝いている。

後景のドアの向う側に設けられた、華やかなフロリンドの部屋のパーティーと、ペドロに給仕されて夕食をしたためのトマゾのテーブルの対比は、この喜劇の構想の中心である二つの世界を表現する仕掛けとして効果的に設定されている。トマゾは、自分の前を素通りしてフロリンドの部屋へ次々と運びこまれる特別料理を目にし音楽を耳にして、“すごいなあ！”と感嘆の声をあげる。

どうしてあんなことがうまくできるんだろう？^⑬

あるいは、フロリンドが前景へ現われて歌をうたうと、

何て上手に歌えるんだろう。こういう奴と比べたらおれたちは畜生みたいなものだ^⑭！と、ただただ感心する。

歓びに輝くフロリンドが周囲に華やかな空気をまき散らしながら歌うかたわらで、トマゾが上記のような讃嘆の言葉をつぶやくとき、そこには、甘美な夢への憧れを、決して我が物とはなしないトマゾ自身の、深い諦めの念が浮き彫りにされているのである。何十本ものろうそくや花を飾るようフロリンドが指示したパーティーの部屋は、舞台上にはドアが置かれるだけで、その内部は、トマゾの目にも観客の目にも触れないよう設定されている。宴が果てて、クリスティーナ達が部屋へ引きあげ、音楽も鳴り止んだあと、トマゾは遠慮がちにフロリンドに飲み物をすすめ、しばらくの間杯をくみかわすことに慰めを見出している。

その時フロリンドは、高揚した気分の中でトマゾに語りかける。

……今の時間、ぼくは測り知れないほど幸福だった。……彼女がそこに居るという想い。

そこには、抱擁以上のものがあるんだ。^⑮

その上、トマゾと語り合ううちに、彼の感激はいっそう高まっていく。

……人生を生きる価値のあるものにするのは、……結婚（Ehe）のうちに、…船長さん！
確固とした誠実さの至福のうちに、あるんです！……フィレモンとバウキスのお話を聞いて涙がこみあげてきたことはありませんか？——彼女は知っています、私が彼女を妻にするだろうって^⑯……（目に涙をうかべる。）

フロリンドの言葉は、“麻醉剤として働き、それによって彼は高揚し、真の恍惚と妄我の状態を惹き起こし^⑰”で、人生への誠実な結びつきを象徴する「結婚」への深い共感を吐露している。ところが、そのすぐ後で、人びとが寝静まると、フロリンドはクリスティーナの寝室へ忍んで行くのである。それは、フロリンドの誘惑を経てトマゾとクリスティーナの結婚が成就するという、この劇全体の構想を支える伏線となっている。第3幕の終り近く、結婚へ到達した二人の前へ姿を現わしたフロリンドが、このシーンで印象的に使われたフィレモンとバウキスの物語を再び口にしていく。

あなたはフィレモンとバウキスの物語に涙がこみあげるなんてことはないでしょう。……つまり、あなたはそんな物語を読んだりしたことはなかったんだ。だけど、あなたはそうした人生を生きるでしょう……^⑱

フロリンド（＝カザノヴァ）が、共に死ぬことを神に願って一本の木と化した夫婦の物語に感

動の涙を流しつつ恋人の部屋を訪れるという展開は、喜劇を構成する要素として有効なイメージである。それと同時に、自らの住みえぬ世界への強い憧憬と羨望の言葉は、トマゾのフロリンドへの讃嘆の念と対をなすものであるのを指摘することができる。そのようにして、誘惑者の瞬間的な愛の陶醉と、堅実な人生の永続的な愛を象徴する「結婚」が、同じ深さをもって表現され、魔的な夢と、現実の生との葛藤が、リアリティーをもって描き出されているのである。

以上のようにみると、この作品の基底となる図式が姿を現わしてくるのであるが、その図式によって実現される全体的な構想を、内容の進展に即してもう少し追ってみることにする。

トマゾの求婚

第2幕は、フロリンドがヴェネチアへ、クリスティーナが郷里の村カポチボンデへ出発するところで終る。その際フロリンドは、一応再会と結婚を約束して別れるのであるが、もはやその気を失くしてしまっていることがほのめかされ、トマゾにクリスティーナとの同行を強くすすめるのである。

第3幕は、クリスティーナが経営する村の宿の広間を舞台に、トマゾの求婚と結婚の成就が主題となっている。

第2幕の終りからすでに2ヶ月あまりが過ぎた場面で幕が上る。トマゾはペドロを伴って引き続きそこに滞在しており、単なる客というより一家の友人となった今、ようやくクリスティーナに求婚する決意を固めたのであるけれども、口の重い彼はなかなか言い出すことができないでいる。

クリスティーナはトマゾを心から信頼している。にもかかわらず、フロリンドとの一夜によって、“何かが起こり、過ぎ去ってしまった”として、当然のことながら、ためらいがある。彼女がそのためらいを捨ててトマゾを受け入れるに到る過程で、この作品の二つのモチーフが明らかにされていく。一つは、

結婚は善いものよ。そこではすべてが清められるんです。それは空しい言葉ではないんです^⑮。

このようなクリスティーナの直接的な「結婚」讃美に呼応して、すでに第1幕でも述べられた、よりいっそう具体的なトマゾの結婚観が再びくりかえされる。

……ここに私の場を見出し、私の骨を聖別された土に埋め、……子供達を生むこと。子供達は父親の土地で育てられ^⑯……

移ろいゆく時の中に存在への道を見出し、永遠へのかかわりを求めようとする意図が直接語られていて、フォルケのいうように、“ホーフマンスタールが表現のイロニーの下に隠そうとした本来深い魂のこもったもの、……告白的なものが、おいおいを破って現われている。”^⑰

もう一つのモチーフは、やはりクリスティーナが語っている。

あそこでの、あの出会いの前は、私は賢くなかったの。彼に会う前だったら、あなたと会っ

でも何も起こらなかったでしょう。^②……

作者はここで、クリスティーナが、フロリンドとの出会いを経てはじめて、トマゾを見出しえたことを語らせている。そして、フロリンドが旅の途上で立ち寄り、二人に別れを告げて姿を消したとき、

……彼は私から何も奪いはしなかったわ。彼のものなんて何もないんです。……

私が彼に会ったのは、何てよいことだったでしょう。……あなたと彼が並んでいるところを見せてくれて本当によかった^③

と述べて、心からトマゾを受け入れるのである。

結び

先に指摘したように、この喜劇では、瞬間的な夢と仮象の世界と、生成と恒常を求める実直な人生が、それぞれ、主人公フロリンドとそれに対置されるトマゾの姿に造形されている。

物語の根幹をなす両世界へのクリスティーナの関わりは、一方に失望し他方を得るといった単純な進展を意味するものでは決してない。まして、享樂的生活の誤りを悟って誠実な結婚を受け入れるといった、教訓の匂いを指摘することは不可能である。それはこの喜劇が、移ろい易い夢の不実も、変らぬ愛を誓う誠実も、ともに含んだ人間の全体的な生の姿を捉えることに成功したからに他ならない。

一時の陶醉を求めてクリスティーナを誘惑するフロリンドと、持続する日常の支えを求めて求婚するトマゾは、互いに相手の世界へは帰属しえない自らの資質を知っているが、というより知りつくしているからこそ、相手に対して深い共感と憧憬の念を寄せるのである。そうした共感と憧憬が、どのように表現されているかは、これまでに見てきた通りである。

この喜劇の主題は、これら二つの人物像を軸にして、フロリンドの誘惑と、それを経ることでクリスティーナとトマゾが結婚するに至る過程を描くことにある。その中でもっとも鮮かな輪郭を現わしているのは、華々しいフロリンドの姿である。さらにまた、永続と誠実の証しとしての「結婚」は、フロリンドの言葉で語られるとき、もっとも敘情的な輝きを帯びている。最終的には「結婚」への讃美を実現する形を取りながら、放恣な誘惑者の姿が精彩を放ち、恋の冒険者が深い実感をこめて「結婚」を讃えるといった逆説的な表現の仕組みによって、複雑な生の実相を喜劇の形で捉えることに成功した作品といえよう。クリスティーナにとって、フロリンドとの仮初めの出会いも、トマゾとの堅実な結びつきも、ともに「人生の贈物」^④なのである。

〔注〕

- ① クリスティーナの綴りは、Cristina が使われているが、一部の版で Cistina とされているものもある。
- ② カザノヴァ回想録 1、窪田般彌訳、河出書房、1968、S.429
- ③ Hofmannsthal, Hugo von : Gesammelte Werke in zehn Einzelbänden, Dramen IV, Frankfurt a.M., 1979 (以下 Dramen IV と略) S.118
- ④ Dramen IV S.138

- ⑤ 同上 S.139
- ⑥ 同上 S.139
- ⑦ 同上 S.140
- ⑧ 同上 S.141
- ⑨ 同上 SS.149-150
- ⑩ 『Poesie und Leben』 富士川英郎訳による。
- ⑪ Dramen IV S.152
- ⑫ 同上 S.153
- ⑬ 同上 S.168
- ⑭ 同上 S.169
- ⑮ 同上 S.170
- ⑯ 同上 S.173
- ⑰ Alewyn, Richard : über Hugo von Hofmannsthal, Göttingen, 1963, S.110
- ⑱ Dramen IV S.217
- ⑲ 同上 S.209
- ⑳ 同上 S.212
- ㉑ Volke, Werner : Hofmannsthal, Hamburg, 1967
- 横山滋訳：ホーフマンスタール, 理想社, 1971, S.143
- ㉒ Dramen IV S.210
- ㉓ 同上 S.210
- ㉔ 『冒険者と歌姫』に付された副題

〔参考文献〕

- Wyss, Hugo : Die Frau in der Dichtung Hofmannsthals, Zürich, 1954
- Alewyn, Richrd : Hofmannsthals erste Komödie , In über Hugo von Hofmannsthal, Göttingen, 1963
- Volke, Werner : Hofmannsthal , Hamburg, 1967
- 横山滋訳：ホーフマンスタール 理想社, 1971
- カザノヴァ回想録全 6 巻, 窪田般彌訳, 河出書房1968
- 富士川英郎他訳：フーゲー・フォン・ホーフマンスタール選集 3 論文・エッセイ, 河出書房新社, 1972
- 窪田般彌：カザノヴァーロココの世紀, 河出書房新社, 1983